

# あとがき

記念誌編集委員長 真鍋恒博

## 工学部50年史の企画

工学部創設50周年記念行事が話題になるより前だったと思うが、建築学科の50周年記念行事と記念出版の事が教室会議で話題になったのは、2009(平成21)年10月のことである。金町問題がこじれて学部長を辞めた直後の、言わば校務から解放された時期でもあり、もはや昔の事を知っている現職教員は他にいなくなっていたから、50年史執筆は小生にとって当然の責務であった。企画が話題になった時点では、現職教員からは「私たちが全部やりますから、真鍋先生は委員長だけやって下さい」という話だった(もとより信用してはいなかった)が、まだまだ時間はたっぷりあると皆が思っており、さほど現実的な問題意識を持っている者はいなかった。

そうこうする内に時間はどんどん経って行く。先に出版が決まって動き出した『工学部50周年記念誌』にも関与したが、あくまで学部レベルの記念誌であり、学科独自の変遷については7ページに留まった。したがって新たな調査などは行わず、既に出版されていた40年史(『東京理科大学工学部建築学科四十年の記録』2004年3月)の内容を大幅に短縮したものに終った。

## 今回の企画の経緯

作業の本格開始前には、定年後は暇になる筈だからと、40年史の前書きにも書いたとおり、老後の楽しみ、生き甲斐としてちょうど良く、昔の事を知っているのはもはや自分だけで、さいわい「記録魔」でもあったから、主要な仕事は全部一人で引き受けてしまった。しかし、いざ嘱託教授生活を始めてみると、予想とは違って、何だか一向に暇にならないではないか。しかも自分の退任のイベントの準備や、研究室の撤収作業でぎっくり腰になるなど、なかなか具体的な作業をスタート出来ないまま時間だけが経ってしまった。

もっと早くから系統的に資料収集を進めておくべきだったと反省しながらも、さまざまな資料を調べ始めた。内容が具体的に纏まり始めるとさらに正確な裏付け資料が欲しくなる、という過程については「はじめに」にも書いたとおりである。脱稿ぎりぎり、さらに校正段階になってからも、事務方に資料請求をしたり、古い資料で確認するなどの作業が続いた。しかし脱稿予定の時期に折りしも葛飾移転があったため、保存されていた各種の貴重な資料の梱包時期に追われたり、私事だが自転車事故で脚腰を傷めるなど、作業にはかなりの労苦を強いられた。だが何とか、今回の刊行にこぎつけることができた。

現任教員の協力があまり得られず孤軍奮闘状態、などと愚痴めいたことも言いたくはなるが、上記のように何でも引き受けた自分にも原因はある。しかも、昔の資料を見ても、当時の状況が分かっていなければ意味の理解は難しいし、多量の教室会議資料(真鍋の個人ファイル)は、真鍋研究室で訓練を受けた者でもなければ「真鍋文字」の解読も難しかろう。最終時期になって、新任補手・青木公隆君の助力を得ることができたのは、極めて幸運であった。彼自身も、昔のさまざまな出来事に次第に「はまって」主体的にいろいろ作業をしてくれたのは、大いに力になった。

なお、本書の寄稿を除く部分の殆どを自分で執筆したが、工学部第二部建築学科関連部分については直井編集委員、進路関係については郷田編集委員が執筆した。また人事構成のグラフ作図には、青木補手および呉助教の協力を得た。

### 原稿集めの苦勞

この50年史では、その大半を占める歴史記録部分に加えて、元教員、卒業生および現役研究室による寄稿ページも重要な位置付けになっている。前提や執筆者選定等についてはそれぞれの項に述べたとおりだが、35年史・40年史で苦勞したのと全く同じで、なかなか原稿が集まらなかった。

ただし卒業生の執筆者については、大半から早々に寄稿が集まり、ついに予定した全員からの原稿が揃ったのは感激であった。現職教員や元教員からの原稿提出が遅いのには比べ、同窓生の出版に対する期待の重さを強く感じた。

### 資料について

今回の50年史を纏めるに当たってはさまざまな資料を参照したが、気楽に読んでいただけるよう、煩雑になるのを避けて文中に出典を示すことは省いた。「建築部品・構法の変遷」で数々の論文を発表した身としては、出典明記が必須条件であることは重々承知であるが、さすがに研究論文ではないので省いた。作業の経過中で何度も資料を参照する便のため、仮ファイルでは根拠をいちいち付記していたが、完成版では全て削除した。完璧に正確な記録という水準には到底およんでいないが、かなりのデータに裏付けられた記述であることはご理解いただきたい。

ここで参照した主な資料は以下のとおりである。

**教室会議記録(井口教授の個人ファイル)**：創設2年目の1962(昭和37)年度～1972(昭和47)年度。青焼きの記録が十分読める状態で残っている。学園紛争の

---

時期の記録がかなり疎になっている事から、紛争を纏める立場にあった井口助教授の苦勞が推察できる。紙の余白のスケッチ(落書き)にも時代を感じて面白い(かく言う小生も、教授総会中に幸田先生と「掛け合いスケッチ」に興じたものだが)。**教室会議記録(真鍋の個人ファイル)**：1973(昭和48)年度～2011(平成23)年度。基本的に配布された書類や自分が書いたメモは、「迷ったら残す」の精神で何でもファイルに収納しておくことにしたが、系統的に残した訳ではないので、案外大事な事がすっぽり抜けている。ともかく量が多い(年代が下るにつれて多くなるのはコピー普及の所為)。公式議事録とは異なって会議で決まった結果だけでなく、経過が分かる。

**教室会議等の学科公式記録**：1973(昭和48)～2005(平成17)年度。学科の規定では教室会議・教授総会等の議事録を学科として公式に残すことになっていたようだが、きちんと製本されたものは1994(平成6)年度まで。その後はファイルに挟んだだけで、次第に内容が少なく雑になる。公式議事録には結果しか書いてないので、決まった経緯・理由等は分からないが、それだけならば量的にもさほどではなく、現在は電子化が容易なので、こうした記録・保存は復活させて今後とも続けた方がよい。

**東京理科大学職員名簿**：1963(昭和38)～2004(平成16)年度。在籍教員の把握にはこれが基本である。年末の年賀状に間に合うタイミングで配布されたガリ版→タイプ→ワープロ印刷の名簿である。普通紙コピーのない時代は、次年度に跨がって変更を記入しながら使っており、それを加味して読まないと、年度判断が1年ずれる。また人事課が作ったといえども、掲載された肩書が今ほど厳密ではなかったようで、定年後の教授の職分など詳細が不明な場合もある。

**講義概要(シラバス、履修案内等)**：1963(昭和38)～2004(平成16)年。カリキュラムの変遷は学修簿が基本だが、それと同内容なので参照した。ただしカリキュラムが変わった理由・経緯については、教室会議の雑メモと記憶だけが頼りである。講義概要に掲載されている教員名簿は、印刷時期から前年度の陣容である。これには教員側でも気付いて、新任・退任教員等の訂正は(印刷に間に合ってもあえて)せず、「〇〇年3月現在」と註記するようにした記憶がある。新入生ガイダンスで変更箇所を黒板に書く等で説明するが、記録には残らない。

**学部・学科名簿**：工学部で作るA4版1枚の全学科教員リスト、学科で作る研究室ごとの教員・院生等のリスト、非常勤講師懇親会の案内者一覧等からは、上記

の名簿では分からない具体的な人の配置が分かる。

**大学案内：**施設の変遷については、きちんとした図面が系統的に残っていない。建物の図面ではなく、どの部屋（研究室等）がどこにあったかを知りたい訳だが、そのためには入学案内パンフレットにある校内略図を使うこととした。これについては、元第二部建築学科助手で管財課勤務の塚田幹夫氏の協力によった。

**大学報縮刷板：**No.1・2（第1号：1967/昭和42年7月～第100号：1991/平成3年4月）。学科内の詳細な事象は無理だが、主要な学内イベントの時期などが特定できる。

**大学の白書・ホームページ等にある本学の沿革等：**学科の歴史というよりは大学全体の歴史になってしまうが、学科の歴史を解明する上では、前提となる大学や学部全体レベルでの歴史が分かっている必要もある。

**各種事務記録：**永久保存文書も含めて、過去のさまざまな記録が事務の倉庫に眠っている（筈である）。今回もいろいろな部署にお願いして、必要資料の取り寄せや調査をお願いしたが、いずれも協力的であったことには大いに感謝する。しかし、電子化されたものなら出しやすいが、情報が電子化された時点で全てが入力された保証は無い。紙で保存してある資料を調べて裏付けを取るには、多大な時間と手間を要し、ある筈だということと、実際に見られることとは大違いである。

**諸委員会のファイル等：**主として自分が関与した期間に限られ、系統的な記録ではないものの、各種の会議（学部長会議・部局長会議、評議員会、再構築関係、学部・学科内各種委員会、等々）の議事録や報告書も、参考にした。

他にも大学事務の関係部署から過去の関連情報の提供を受けた。年度末で移転を控えた多忙な時期に、いろいろな情報を提供して下さった関係部署の方々には、心より感謝する。

こうした大学の記録の他に、真鍋個人の資料（スケジュール帳、日記、アルバム・写真、旅行等の各種ファイル類・データベース、金銭出納帳等々）も極めて有用な参考資料となった。特に毎日持ち歩いているスケジュール帳（1975/昭和50年以降は能率手帳に統一）は、時間帯をヴィジュアルに図示し、さらにマーカーで色分けしてあるので、各種の行事の日時の特定に極めて有用であった。小生の「記録魔」的性癖が役立つとは思っていたが、ここまで活用するとは思わなかった。

こうした資料に基づいて纏めたとは言え、不明箇所を完全に解明できた訳ではなく、各所の記述相互の不整合等も完全に払拭できた訳ではない。記述内容の誤りや、記録に漏れている重要な事象等にお気づきであれば、御一報いただきたい。

東京理科大学工学部建築学科50周年記念事業  
実行委員会・記念誌編集部会

編集委員長	真鍋恒博	第一部建築学科元教授
編集委員	直井英雄	第二部建築学科元教授
	郷田桃代	第一部建築学科准教授
	山名善之	第二部建築学科准教授
	大岩昭之	第一部建築学科元助教

---

## 東京理科大学工学部建築学科50年の記録

発行日	2013(平成25)年5月18日
発行	東京理科大学工学部建築学科 東京都葛飾区新宿6-3-1 TEL: 03-5876-1717(代表)
執筆・編集	東京理科大学工学部建築学科50周年記念事業 記念誌編集委員会(主査: 真鍋恒博)
編集協力	(株)建報社、(株)南風舎